

# 中国の中等教育日本語教科書における日本像に関する研究 (第 2 報)

## — 2003 年度教材審定委員会初審通過 初級中学校用教科書を中心に —

A Study of Images of Japan in the High School Japanese  
Language Text Books of China (2nd Report)

— 2003 Approved Text Books for Junior High School Level —

飯 田 史 也

Fumiya IIDA

学校教育講座

(平成 17 年 9 月 30 日受理)

### はじめに

どの国においても、児童・生徒が、学校教育の中で外国についての知識やイメージを習得するにあたっては、地理や歴史の教科書だけではなく、語学の教科書も重要な役割を担っている。筆者はこれまで、韓国と中国の中等教育用日本語教科書の中に描かれた日本像、日本人像について考察してきた<sup>1)</sup>。これらの国の中等教育で使用されている日本語教科書は、生徒に語学としての日本語を習得させるだけでなく、単元内容やそこに掲載される挿絵や写真等の図版資料等を通じて、日本の事情を意図的、無意図的に理解させる機能をもっており、歴史や地理の教科書とは異なる視点で、考察する必要があると考えたからである。

中国の中等教育における日本語教育の事情については、すでに前回の拙稿において概観したので再出を避けるが、中国の中等教育に「日語」(「日本語」)が導入されたのは 1982 年であり、2005 年現在で 20 余年の歴史を持っている。学校で使う教科書は生徒たちにとってもっとも身近なメディアであること、また中国で出版される日本語テキスト、日本語教材の多くが高等教育レベルの学習者を対象としたものであることから、前回及び今回調査研究する人民教育出版社の中等教育用教科書『日語』は、中国で日本語を履修する中高生に大きな影響を与えるものであるといえよう。

筆者は 2000 年に、中国の中等教育の日本語教科書(1998 年度教科書)のうち、とくに高級中学校(日本の高等学校に相当)用教科書について考察

した。今回は、前回の検証から 5 年を経て、その内容が大幅に改変され、また水谷修顧問、加納陸人主任編集委員ら 5 名の日本側編集委員が参与し、その日本情報が豊富になった初級中学校(日本の中学校に相当)用の教科書を中心に考察したい。対象とするのは、今回入手することのできた人民教育出版社課程教材研究所日語課程教材開発中心編著義務教育課程標準実験教科書『日語』(七年級上冊, 下冊, 八年級上冊, 下冊)(経全国中小学教材審定委員会 2003 年初審通過)の 4 冊である。

以下( )内はすべて引用者による。また引用のうち簡体字表記はすべて日本の漢字に直して表記する。また各教科書はつぎのように略記する。

初級中学用教科書『日語七年級上冊』

→『初七・上』

初級中学用教科書『日語七年級下冊』

→『初七・下』

初級中学用教科書『日語八年級上冊』

→『初八・上』

初級中学用教科書『日語八年級下冊』

→『初八・下』

### I 日本に関する写真記事

『初八・上』、『初八・下』は冒頭の 3 ページにわたりカラー写真が掲載されている。ここではまずこの写真ページについて検証してみたい。

『初八・上』には「我的学校」(私の学校)の見出しのもと、東京都文京区立第七中学校の写真が 11 種、また「学校的午餐」(学校での昼食)の見出

しのもと、7種の写真が掲載されている。見出しの下には、全校生徒数が135、教職員数が23で、比較的小規模の中学校（「是規模較小的学校」）であることや、「自由開放」的な校風であることが記述される。「我的学校」の写真の内容は、校舎の外観、校舎入り口の生徒用、教職員来賓用下駄箱、校舎内の廊下とそこにかけられた掲示板、普通教室での授業の様子、理科実験室での授業の様子、体育館での全校朝会、休憩時間に生徒たちがバスケットボールをしている運動場の様子、プール、教室の掃除の様子、係の当番表である。また「学校的午餐」の内容は、給食当番が手を洗ったりエプロンを着けたりしている様子、教室での給食配膳の様子、生徒たちが教室で給食をとっている様子、ある日の一人分献立を配膳プレートごと俯瞰したもの、廊下の掲示板等に貼付してある「少年写真新聞社」の「給食ニュース」の11種である。それぞれの写真には、たとえば体育館の写真には「毎週一我們在這里参加晨会」（毎週一度、私たちはここで朝会に参加する）といった解説が付されている。なお教科書「前言」（まえがき）部分には、これら写真が文京区立第七中学校からの提供であることが紹介されている。

『初八・下』には、東京都渋谷区の私立渋谷教育学園の、「小組的活動」（クラブ活動）を中心とした「課外活動」の様子が、「体育」、「文化」、さらに「文化」のうちの「茶道小組」（茶道部）の3つに分けて掲載されている。全体の解説文にはサッカー、柔道、水泳、卓球など15の体育系クラブと、英会話、演劇、古琴、合唱など14の文科系クラブの名称が紹介され、それぞれ野球部、テニス部、棒体操部、剣道部、古琴部、演劇部、吹奏楽部、将棋部、料理部の活動風景の写真が掲載されている。うちテニス部の写真には、「テニスの練習場は、校舎屋上のテニスコートにある」との解説が付されている。また1ページ全体が割り当てられている茶道部の写真には、校内に設置された茶室のほか、茶を立て客人にもてなす場面までが6葉の連続写真で解説されている。なお『初八・上』同様、教科書「前言」（まえがき）部分には、これら写真が渋谷教育学園渋谷中学校からの提供であることが紹介されている。

上記のように、『初八・上』『初八・下』とも、それぞれの写真の提供は文京区立第七中学校および渋谷教育学園渋谷中学校であるが、スナップショットを中心としたそれらの写真は、その構図やトリミングの状態から見て、いずれもプロの写真家ではなく、おそらくは当該中学校の教員によっ

て撮影されたものとおぼしい。しかしそれだけにむしろ、各中学校の生徒たちの日常生活が、自然な形で切り取られているという印象を受ける。

## II 「專欄」（コラム）で紹介される日本

教科書各単元は、『初七・上』『初七・下』では「会話」「解説」「コラム」「語音」（『初七・上』のみ）「練習」、また『初八・上』『初八・下』では、「会話」「本文」「解説」「コラム」「練習」で構成されている。

うち「專欄」と記されたコラム欄には、各約半ページがあてられている。このコラムでは日本の一般的な中学生の日々の生活や、現代の日本社会の様子が中国語で解説されており、中国の生徒たちが、日本の中学校の状況を含む日本事情について広く理解できるようになっている。「会話」「本文」などの文章はあくまで語学学習のためのものであり、既習表現や、その単元で習得すべき文法項目や表現だけを使って「日本」を浮き彫りにするには限界がある。しかし中国語で書かれた「コラム」ではそのような制限がないため、日本社会の状況、日本の中学校の状況などのかかなり詳しい状況についても記述することができる。そのためこのコラム欄は、中国の生徒が日本理解、日本人理解を進めてゆく上での中心的な役割を担っているといえよう。

このコラム欄では、『初七・上』と『初七・下』では架空の日本人中学生「高橋真由美」が、また『初八・上』と『初八・下』では名前の出てこないさまざまな日本人中学生が、自身の家庭や学校生活を解説する形がとられている。また各コラムの多くには、その内容に関連するモノクロの写真が一枚ずつ掲載されている。

各コラムの題目（（ ）内に和訳）および添付される写真（被写体を[ ]内に記入、キャプションのついているものは日本語に訳出して記入）は、以下のとおりである。なお全体に通し番号を付す。

### 1 『初七・上』第1課：「我叫高橋真由美」（私は高橋真由美です）

「高橋真由美」（以下真由美）の自己紹介のコラムであり、自身は13歳であること、47歳で国立大学の中国語担当の助教授である父「敏夫」、43歳でボランティアの手話活動に参加している主婦の母「華子」、20歳の大学生の兄「健」との4人家族であること、自身は文京区立第十二中学校（架空）の1年生であること、中学では水泳部と美術部に所属していることが紹介される。

2 『初七・上』第2課：「我居住的街区」（私の住んでいる街）：[日本の住宅]

真由美の住んでいるのが文京区であること、学校、神社、公園数の多いその文京区の状況、自宅は一戸建て住宅（一棟独門独院の日本式房屋）であり、真由美と母とが、小さな庭でのガーデニングにいそしんでいること等が語られる。

真由美の家族に関する記述については、4人それぞれに具体的なイメージが付与されているが、ガーデニングや手話ボランティアに参加する母「華子」には、大学生と中学生の子どもをもつ世代の母親の、現代的なイメージが設定されている。

3 『初七・上』第3課：「我的学校」（私の学校）：[ある中学校の校舎]

真由美の通う文京区立第十二中学校について、その生徒数が420で、教職員数が25であること、校内に体育館、プールがあり、入学式の頃には校内の桜がきれいであること、校章の由来（写真のそばに校章が図示されている）、日本では大多数の子どもは、近隣の公立小学校、中学校へ通うが、真由美の小学校の同級生の中には、私立中学校へ進学した者もいることが紹介される。校章については、「我們学校の校徽是由文京区的“文”字和中学的“中”字以及十二個円点組織的表示“文京区第十二中学”（文京区の「文」と中学校の「中」、それと12個の円マークで構成され、文京区立第十二中学校を表す）と、きわめて具体的な解説がつけられている。

4 『初七・上』第4課：「我的一天」（私の一日）：[中学生の登校風景]

真由美の毎日の生活時間が紹介される。内容は毎朝7時頃起床し、8時頃家を出ること、朝食は母が準備してくれ、父が一番に食卓に着くこと、起き出すのは父が一番遅いこと、真由美は放課後は水泳部か美術部の活動を行った後5時半頃帰宅、7時頃夕飯となるが、父が遅くなる時には3人で先に食べること、夕食後は少しテレビを見て、入浴後10時頃就寝するというものである。

ここでは、大学での授業時間割等に応じて、朝にゆとりのある日本の大学生（兄、健）の生活時間がリアルに示されている。

5 『初七・上』第5課：「早餐」（朝食）：[洋風朝食、和風朝食]

日本の学生の3分の2が洋風の朝食をとっているという結果が示され、洋風和風それぞれの献立の具体例が写真とともに示されている。また3食とも米を摂る日本人が少なくなっていることが語られる。

6 『初七・上』第6課：「晚餐是一家人团聚的時候」（夕食は家族が集まる時間です）

夕飯は真由美の一家全員が集まる唯一の時間であること、真由美は母に学校での出来事や友達のことを話し、父とは時事的なことを話すこと、食後はテレビを見るが、家族のチャンネル争いのことや、母からは早く勉強しなさいと言われること等が語られる。

7 『初七・上』第7課：「我的房間」（私の部屋）：[日本のある中学生の部屋]

真由美の部屋について語られ、真由美が毎日ここで勉強し、その後は音楽を聴いたり、小説や漫画を読んだりすること、部屋にあるオルゴールは今年の誕生日に父が買ってくれたものであること、兄も私の部屋にきて、ギターで合奏したり歌を歌ったりすることが語られる。掲載されている写真は、部屋でギターを弾く兄と、その側でリコーダーを吹く妹というものであり、文中に示される健と真由美兄妹をイメージした写真となっている。しかし、現代の日本においては、大学生の兄と中学生の妹という関係では、妹の部屋で合奏するという状況は、あまり一般的ではないと思われる。またギターとリコーダーという組み合わせはちぐはぐであるが、それがむしろ、この写真の演出されたものではないことを示しているようである。

8 『初七・上』第8課：「周末」（週末）：[真由美の家の愛車]

学校は土、日は休みであるが、土曜日にはクラブ活動があるので、午前は美術部午後は水泳部の練習に参加すること、6月から9月はよく水泳の試合があるので結構忙しいこと、休みの時は早く起きて部屋の掃除をし、庭の手入れをし、午前中に母と買い物をし、午後は友達と遊ぶこと、父が忙しくない時は、一家そろってドライブに出かけるが、春はピクニックに、夏は海へ出かけること、また屋外で料理したりすることが語られる。

ここには、クラブ活動、とくに体育系のクラブに参加すると、週末も繁忙となる現代の中学生の様子が描かれている。

9 『初七・下』第1課：「上学」（登校）：[登校する中学生と校舎]

真由美は毎日友人の明美とともに歩いて登校するが、自転車や電車で通学する生徒もいること、登校時には必ず制服を着なければならないこと、真由美の中学校では男子は「黒色立領」（黒の詰め襟）、女子は「水兵服」（セーラー服）を着用すること、真由美の母は経済的であるという理由で制

服には賛成であるが、真由美自身は、気分は晴れるしやる気にもなると思うのでおしゃれな服を着たいこと、父も真由美の意見に賛成であることが語られる。

真由美の母親が現実的な理由で制服に賛成であるのに対して、父親が真由美に理解を示しており、そうした母と父との対比が興味深い。なおここで使われている「水兵服」という語では、このような学校制服が中国にはないだけに、海軍の兵員の制服としての軍用イメージが浮き上がってしまう。「水兵服式的女学生制服」<sup>2)</sup>などの訳語が望ましいと考えられる。

10 『初七・下』第2課：「我的班級」(私の学級)：[クラスの授業風景]

真由美のクラスは1年生4組であり、男子17名、女子18名、担任は数学の田中先生であることが示され、何人かのクラスメートの特徴が語られる。

11 『初七・下』第3課：「我們的課程表」(私たちの時間割表)

真由美のクラスの時間割りが示され、月曜日から金曜日まで授業があり、1時間は50分であること、中学から新たに英語を学び始めること、月曜日の午後の「総合学習課」(総合的な学習の時間)では、先生から各自の居住区の環境状況を調査するという課題を与えられていること等が示される。

ここではとくに、総合的な学習の時間の紹介が注目されるよう。

12 『初七・下』第4課：「学校的午餐」(学校の昼食)：[クラスの給食の様子]

4時間目終了後の給食では、担当係が学校の厨房からの運搬と配膳を行なうこと、ある日の献立の内容、食前に全員で「いただきます」と唱和すること、小学校と中学校では教室の自分の机で食べることが示される。

食堂に向いて昼食をとるのではないことが、中国の生徒に対してひとつの情報として示される。

13 『初七・下』第5課：「放学后」(放課後)：[生徒たちの教室清掃の様子]

課業終了後のホームルームと生徒による教室の掃除のあとに、真由美は水泳部の活動に参加するが、クラブ活動へ所属は任意のため、帰宅する生徒もいること、友達の明美は月曜日にピアノ、水曜日に英語を習っていること、さらにある生徒は、高校入試準備のため、塾に通っていることが語られる。

14 『初七・下』第6課：「課外活動1」(課外活動1)：[プールでの水泳の様子]

真由美は水泳部に所属しているが、毎週4回の

活動があり、夏期はプールで、冬期は陸上トレーニングで練習することが示される。また各種の体育系クラブの名称が紹介され、女子にはテニスが、男子には野球とサッカーが人気のあること、毎年、区や東京都の競技会があり、良い成績を上げるために皆努力していることが語られる。

15 『初七・下』第7課：「課外活動2」(課外活動2)：[体育館での合唱の様子]

文科系クラブの説明が行なわれ、各クラブの名称と、真由美が参加している美術部の文化祭等における活動が紹介される。また真由美は自身のデザインしたアニメーションを文化祭で発表することになっている。ここでは、水泳部という体育系だけでなく、美術部にも加入しているという設定にすることで、文科系クラブの状況が説明され、そのバランスがとられている。

16 『初七・下』第8課：「学校的假期—暑假、寒假和春假」(学校の休業期；夏休み、冬休み、春休み)[野外活動での炊飯等の様子]

4月から翌3月までの各学期の期間の解説の後、今年の夏休みには、学校から八ヶ岳へ2泊3日のキャンプに出かけること、また毎年8月の盆には、真由美一家は母の実家の静岡へ帰省し、従兄弟たちと魚釣りや花火大会に出かけることが語られる。

17 『初八・上』第1課：「校歌」(校歌)

上述のように、『初八・上』からは「高橋真由美」とは限らない、さまざまな生徒の語りとなる。

このコラムでは、実在する文京区立第七中学校の校歌が楽譜とともに提示されている。一般的に日本の学校には校歌があり、入学式、卒業式等のほか、全校集会や同窓会等の場で歌われること、学校の周辺の自然環境を賛美し、理想、希望、友誼、青春、人生観等を歌うものが多いこと、作詞・作曲は地域出身の著名人のほか、在校生や卒業生、教師等によっても行なわれることが述べられる。

18 『初八・上』第2課：「早読10分鐘」(朝の10分間読書)：[クラス全員が読書に集中する様子]

日本の小中学校で近年広く行なわれている朝の10分間読書について解説される。これはたんに読むことだけが目的で感想等は書かないこと、読むべき本が分からない時には、学校図書館司書がアドバイスしてくれること、この活動により、言語表現力が高まり、共通の話題も増えたこと等が語られる。

19 『初八・上』第3課：「我們的班報」(私たちのクラス新聞)：[皆で協力して学級新聞を制作する様子]

それぞれのクラスに学級新聞があり、週に一度

2 ページのものが作られること、学級新聞には、市、県レベル、全国レベルのコンクールがあること、最近、先生の指導の下、インターネット新聞を試作してみたことが解説され、さいごに中国にも黒板新聞があると聞くので、交流してみないかという提案がなされる。

20 『初八・上』第4課：日本の相撲（日本の相撲）：[全国中学生相撲大会の場面]

日本の相撲は1909年に国技に定められたこと、職業相撲は大相撲と称し、毎年15日間ずつ6場所開催されること、20世紀後半以降は、外国人力士が新風を吹き込んでいること、「私」は小学校の時に学校代表として地区の試合に参加したが、いい成績は残せなかったこと、将来は関取になりたいが、今は中2なので、学習成績での横綱になりたいことが語られる。

21 『初八・上』第5課：「中学運動会」（中学校の運動会）：[パン食い競走の様子]

毎年春と秋、運動会が開催されるが、中学校では競技性は弱く、このため体育祭とも呼ばれること、親が参観、参加しやすいように週末に開催されることが多いこと、親たちは童心に戻り、子どもを励ましたりビデオを撮ったりすること、さらには応援団のこと等が説明される。

22 『初八・上』第6課：「中学生とテレビ」（中学生とテレビ）

中学生になってからは勉強が忙しくあまり見ないが、「私」は毎日平均1時間、土日は2・3時間テレビを見ること、一番好きなのはアニメで、「ドラえもん」、「ちびまる子ちゃん」は毎週必ず視聴すること、その他に好きなのはバラエティ番組、ドラマ、スポーツ番組、音楽番組、実際の中学生の現実の経験に基づいて制作される「中学生日記」、中高生がその悩みをテレビで討論する、「真剣10代しゃべり場」等であることが語られる。

中国でもそのキャラクターがよく知られている「ドラえもん」や<sup>3)</sup>、「ちびまる子ちゃん」などのほか「真剣10代しゃべり場」があげてあるのは興味深い。中国の中学生は、この日本の中学生が毎週「ドラえもん」や「ちびまる子ちゃん」を視聴していることに幼さを感じるかもしれない。

23 『初八・上』第7課：「日本の“塾”」（日本の“塾”）：[学習塾の案内パンフレット]

日本には正規の学校とは別に、日本語で塾と呼ばれる補習学校があること、私のクラスメートの多くが塾に通っているが、それは自身の意志というよりは、親が「いい学校」への進学を願慮して行かせていること、「私」は家庭の経済状況のこと

もあって、塾には行かないが、高2になったら行きたいと考えていることなどが語られる。

24 『初八・上』第8課：「小記者」（小さな記者）：[スポーツジャーナリスト乙武洋匡氏取材する中学生たちの様子]

「私」は、日本の「ある新聞社」が行なっている「小記者」（ジュニア記者）に5年生から参加しており、その活動の様子が語られる。

25 『初八・下』第1課：「学校中的心理諮詢」（校内心理カウンセリング）

「私」の学校で、2001年から設置された、学校心理カウンセラー制度について解説される。毎週月曜日に心理学の先生が来るのだが、友達とこのことを相談に行くかどうか悩んでいたが、勇気を出して行ってみると、部屋の様子、先生の話し方などで気持ちが晴れてきたこと、相談内容は秘密にしてくれるので安心できることなどが説明される。このコラムも、先の11：「我們的課程表」（私たちの時間割）に記されていた総合的な学習の時間についての記述と同様に、現代の日本の比較的新しい教育活動について記されたものであり、興味深い。

26 『初八・下』第2課：「修学旅行」（修学旅行）：[修学旅行パンフレット、（旅行先寺院での）僧侶の講話の様子]

学校で、毎年10月に開催される修学旅行について語られる。3年生は3泊4日で京都奈良へ出かけるが、事前に自身に関心をもつ事項の調査研究を行い、現地で考察し帰ってから報告書を書くことや、その他具体的な旅行の思い出が語られる。

27 『初八・下』第3課：「私の理想」（私の理想）

「私」が、多くの中学生が書いた将来の夢に関する文章の中に、身体障害者サービスの専門家になりたいという文章を見つけ感動したこと、平凡な日常生活の中で、自分の努力で周りの人を幸せにできる人生に意義があるのではないかということなどが語られる。

28 『初八・下』第4課：「我們都來動動手」（みんな一緒に手を動かそう）：[技術家庭科での生徒たちの木工作品]

日本では一般に、父親が外で働き、母親が家事を行ない、子どもたちの役割は勉強することだけであるが、そのため私たち中学生は、手仕事の能力が低いこと、技術家庭科では簡単な品物を作る技能を習うこと、「私」が参加する工作サークルの活動の様子等が解説される。

これは先の「高橋真由美」の一家にも共通するものであるが、父親が外で勤務し、母親が家事を

おこない、子どもは家事の手伝いをあまり行わないという、日本の家庭の一般的イメージが記述されている。

29 『初八・下』第5課：「街上流行穿“浴衣”」（街で浴衣を着るのが流行っている）：[学校の文化祭で浴衣を着ている生徒の様子]

儀礼的な場でしか着られることのなくなった着物と違い、浴衣は簡便で蒸し暑い夏には人気があるが、近年は様々なデザインの浴衣も出てきており、また花火大会、祭り、スポーツの試合、観光地など様々な場で浴衣姿が見られるようになっていくことが語られる。

30 『初八・下』第6課：「人気旺盛の“おにぎり”」（人気旺盛なおにぎり）：[コンビニエンスストアで売られている各種おにぎり]

一般的なおにぎりの作り方、コンビニエンスストアができてから、おにぎりの人気が高まり、都内のあるコンビニでは1日平均700個売れること、全国1年間の売り上げは20億個であること、これまでにない中身の、新しいスタイルのおにぎり商品化されつつあることが解説される。

31 『初八・下』第7課：「日式醬湯」（日本のみそ汁）：[インスタントみそ汁、湯を注ぐだけですぐに食用可能]

日本のみそ汁についての一般的な解説がなされる。また先日の家庭科の授業で、みそ汁を作った折、中に入れる具について生徒の意見がまちまちであったが、入れる具についてはとくに決まりはなく、各家庭によって自然に形成されるものであること、最近ではインスタントみそ汁も人気があること、また中国人にとっては、日本料理の中でみそ汁が一番受け入れられやすいと聞いたが、それはたしかかという問いかけが示される。

32 『初八・下』第8課：「日本式的住宅」（日本式の住宅）：[マンション室内の様子]

日本の伝統的な家屋は木造であり、風通しはよいが冬は寒いこと、私自身は都会のマンションに住んでいるので生活は便利だが、父は、空間が狭く、自然環境から離れているのを嫌っていること、父は畳の上を好むが、私は机と椅子の生活がよいこと、日本人の生活スタイルは伝統住宅から離れていっていること等が説明される。

### Ⅲ 「会話」「本文」で紹介される日本

#### 1 「会話」「本文」の日本情報

初級中学向け4冊の教科書『初七・上』・『初八・下』を通じて、各単元では7名の人物が登場する。中国の中学校の日本語教師周敏、中国人中学生王

文、李佳、金英子、バトル（巴特尔）、中国で暮らす日本人中学生中村朝子、青木健太の7名である。うち金英子は朝鮮族、バトルはモンゴル族という設定になっている。「会話」は、これら登場人物が様々な場で会話を行う設定、『初八・上』、『初八・下』の「本文」は、「会話」の内容に関連する文章を、この中の一人が書いたものという構成になっている。

『初七・上』は、生徒たちが初めて日本語を習う、そのもっともはじめのテキストである。そのため各単元は、第1課「おはようございます」、第2課「さようなら」、第3課「いただきます」、第4課「しつれいします」、第5課「ごめんください」、第6課「また きてください」、第7課「ありがとう」、第8課「はじめまして」と、ごく基本的な挨拶表現を習得するためのものとなっている。さらに『初七・下』の各単元も、第1課「友だちの しん君です」、第2課「あれは 何ですか」、第3課「出発は 何時ですか」、第4課「いつ 中国に 来ましたか」、第5課「すみません、郵便局はどこですか」、第6課「あの すいかは 大きいですね」、第7課「いい 試合でしたよ」、第8課「いっしょに 行きませんか」と、基本会話や各種表現のバリエーションをやや高度にした内容である。このように「7年級」教科書2冊では、基本的な会話、表現練習が中心であり、日本理解に関する文章は出てこない。また『初七・上』『初七・下』ともに、各単元はすべて、上記登場人物のかわす「会話」の単元となっている。

『初八・上』、『初八・下』のうち日本文化や日本人の生活に関する内容が盛り込まれるのは、『初八・上』の第6課「おなかいっぱいです」、第7課「明けましておめでとうございます」、第8課「この漢字、どう読みますか」、『初八・下』の第5課「その本を貸してください」である。

『初八・上』の第6課「会話」、「おなかいっぱいです」は、金英子が中村朝子の家に招かれ、食事を出される設定である。以下に引用してみよう。

（前略）

朝 子：どうしたんですか。

金英子：あのう……、朝子さんはスプーンを使いませんか。

朝 子：スプーンですか。あ、英子さんはいつも使いますね。

朝子の母：はい、スプーンです。どうぞ。

金英子：どうもありがとうございます。スプーンは便利で食べやすいです。

朝 子：私はスープの時はスプーンを使います

中国の中等教育日本語教科書における日本像に関する研究（第2報）  
－2003年度教材審定委員会初審通過初級中学校用教科書を中心に－

が、ご飯やみそ汁の時ははししか使いません。

金英子：そうですか。

（後略）

この会話文を承け、「小さな発見」と題された「本文」では、金英子の以下のような文章が綴られている。

みなさんは茶わんを持って、ご飯を食べますか。茶わんを置いて、ご飯を食べますか。わたしは先週、朝子さんのうちに行って、ご飯を食べました。そのとき、わたしは小さな発見をしました。朝子さんの家族はみんな茶わんを持って、ご飯を食べました。わたしの家族は違います。いつも茶わんを置いて、ご飯を食べます。

はしの置き方も違いました。うちでははしを皿や茶わんの右側に置きます。置き方は縦です。でも、朝子さんのうちでは皿や茶わんの前に置きます。置き方は横です。

わたしたちは毎日ご飯を食べます。でも、食べ方やものの使い方はいろいろあります。その日、わたしは朝子さんのうちでご飯を食べ、いろいろなことが分かりました。

前記のように、金英子は朝鮮族であり、朝鮮族の食文化と日本の食文化との違いが、スプーンの使用、茶碗の保持、はしの置き方という3点で比較考察されている。中国の中等教育では、吉林省などの朝鮮族の日本語学習者が多い。この單元では、中国朝鮮族の学習者は自文化と日本文化を、また他民族の学習者は自文化と朝鮮文化と日本文化とを、それぞれ相対化しながら日本語で考察する、一種の国際理解教育の單元内容ともいえるものになっている。漢民族を含む他の民族への質問とも理解できる「みなさんは茶わんを持って、ご飯を食べますか。」という問いかけ、あるいは「わたしの家族は違います。いつも茶わんを置いて、ご飯を食べます。」（いずれも下線部引用者）という表明に、日本文化の理解を通じて、中国における朝鮮族の文化を客体視しようとする姿勢が見て取れよう。

『初八・上』第7課「会話」の「明けましておめでとうございます」は、青木健太が金英子から年賀状をもらう話であるが、「本文」では、日本の平成14年の「お年玉付き官製年賀はがき」の表裏に、宛名書、挨拶文のモデルが記されているものである。

『初八・上』第8課「この漢字、どう読みますか」は、李佳とバトルが健太の母に、「日本の古い

家」について教示してもらう設定である。さらに「本文」は、教示された話をもとに、ふたりが授業で発表する内容である。

（前略）

この写真を見てください。健太君のお母さんは、7歳までこの家にいました。

これは玄関です。部屋は玄関より高いです。

まず、玄関で靴を脱いで、それから部屋に上がります。ここに台所があります。台所の隣に風呂があります。

部屋と部屋の間に廊下はありません。そこにはふすまがあります。ときどき家に人がおおぜい来ます。そのときはふすまを横に引いて開けて、部屋を使います。とても広いです。

（後略）

説明文の横には、この家の平面見取り図が掲載され、ふすま部分に着色が施してある。バトルたちは、ふすまを取り外すことにより、フレキシブルに間取りを変更できる日本家屋の居住空間に注目しているのである。健太の母親の祖父が建てたとされるその家屋は、平面図で見る限り台所も土間式であり、かなり古い建築様式である。おそらくは40歳代と推定される健太の母親の、そこに住んでいたのが7歳までという設定に、世代的に無理のないリアリティがもたせてあるようである。

『初八・下』の第5課「その本を貸してください」は、青木健太が、日本の「屋島」の子どもたちが創ったという本を李佳に紹介する会話單元である。「会話」「本文」の記述では、「屋島」は湖の中に所在する島で、人口約400人、島には中学校がなく小学校だけが存在すると記されている。実在の島でこのような条件に合致するものとしては、琵琶湖中部東岸に位置する滋賀県近江八幡市の属島の沖島と、島に立地する近江八幡市立沖島小学校が考えられる。「屋島」は、この沖島をモデルにした架空のものと考えられるが、「会話」「本文」での「屋島」の説明がかなり具体的なものであること、また「屋島」が、『初八・下』巻末「語彙表」に「本冊会話文或課文中出現の固有名称」（本冊会話文と本文の中で出てきた固有名称）として掲載してあること、さらには「屋島」が香川県高松市の半島部の地名として著名であることなどから、中国の生徒たちが、「屋島」を実際に存在する地名であると誤認することが懸念される。

## 2 「会話」「本文」記事の中国情報

日本や日本人理解に関するものではないが、中国少数民族の状況について記されている以下の単元に注目しておきたい。

また『初八・下』の第8課「会話」単元「すばらしいですね」および「本文」単元「金英子さんのふるさと」は、朝子が金英子とともに英子の「ふるさと」(英子の祖母の家)に遊びに行くシチュエーションで、会話内容と挿絵からその場が白頭山及び白頭山天池と推察されるハイキング途中での二人の会話と、英子の祖母の家で朝鮮族の生活文化に触れた朝子の陳述になっている。

(前略)

その夜、わたしたちは金さんのおばさんの家に泊まりました。朝鮮族の家の作り方で、庭には野菜が植えてありました。部屋の床は少し高く、玄関で靴を脱いで上がりました。部屋には低いテーブルが置いてありました。わたしたちは床に座って食事しました。食事の後で、朝鮮族の服を着て写真を撮りました。その写真は、今、私の部屋に張ってあります。

次の日の朝、食事の前に村を散歩しました。店の名前などが中国語と朝鮮語で書いてありました。私は朝鮮語のあいさつを少し覚えめました。

この旅行では美しい景色や、朝鮮族の文化などを知ることができました。みなさんも一度行ってみてください。きっといい経験ができるでしょう。

先述の『初八・上』の第6課「会話」,「おなかいっぱいです」では、朝鮮族の金英子が、食文化の相違について考察する設定になっていたが、ここではぎゅくに、日本の生徒が中国朝鮮族の文化を学ぶという設定になっている。先述のように、中国朝鮮族の中・高生には日本語学習者が多いが、『初八・上』の第6課およびこの単元は、そうした状況を配慮した単元構成と考えられる。

『初七・下』第8課「いっしょに行きませんか」では、バトルが、去年父親と内モンゴルへ行った話を、李佳に語る会話文になっている。祭りで馬に乗り、歌を歌い、料理を食べたことが紹介され、次の日の「会話」は、李佳がモンゴル族の歌のCDを買ったことを、バトルに話すという設定になっている。この単元は日本語表現の難易度の低い7年級用の教科書のため、上記単元「すばらしいですね」ほどにはモンゴル族の文化についての詳しい解説は見られない。

## 3 日本の歌

『初七・上』では、各課巻頭の「欣賞」(鑑賞)ページに、「うみ」(林柳波作詞、井上武士作曲),「赤とんぼ」(三木露風作詞、山田耕筰作曲),「まっかな 秋」(薩摩忠作詞、小林秀雄作曲),「ふるさと」(高野辰之作詞、岡野貞一作曲),「大きなうた」(中島光一作詞作曲),「かえるの合唱」(岡野敏明訳詩、ドイツ民謡),「ジングルベル」(宮澤章二訳詩、PIERPOND JAME作曲),「春がきた」(高野辰之作詞、岡野貞一作曲)の8の楽曲が、数字記譜法による楽譜とひらがな表記の歌詞ともに掲載されており、各単元の導入を日本語の歌でおこなう方針がなされているようである。なお『初七・下』以上の教科書には日本の歌は巻末にそれぞれ2つずつ、『初七・下』には「ありがとうさようなら」(井出隆夫作詞、福田和禾子作曲),「バラが咲いた」(浜口庫之助作詞作曲)が、『初八・上』には「切手のないおくりもの」(財津和夫作詞作曲),「つばさをください」(山上路夫作詞、村井邦彦作曲)が、『初八・下』には「WAになっておどろう」(長万部太郎作詞作曲),「手のひらを太陽に」(やなせ・たかし作詞、いずみたく作曲)が掲載されている。

## IV まとめ

以上4冊の日本語教科書のなかでは、「青木健太」,「中村朝子」,「高橋真由美」ら架空の登場人物やその家族、あるいはコラムで語る無記名の日本人中学生たちというかたちで日本人が示されていた。彼らは、歴史の教科書に出てくる著名な歴史的日本人とは異なり、家庭や学校という日常空間のなかで生き生きと生活する、学習者と等身大の日本人である。中国語で解説される「コラム」の記事は、学校についてはたとえば総合的な学習の時間や学校心理カウンセリングなどについて説明がされており、また家庭や地域での生活の状況等についても、現代の日本の状況をほぼリアルタイムで解説しているといえよう。さらに、日本の中学校教育や中学生の日常生活を特徴付けるこのような現代的な事例の解説も、たんなる記述紹介に終わるのではなく、それを享受する「真由美」たち日本人中学生の口から、その心情とともに語られることにより、中国の学習者のより深い理解を可能にしている。前回調査した高級中学校(高等学校)向け日本語教科書のコラムは、架空の生徒などの語りを使わない一般的な解説だったが、これが両者の大きな相違点のひとつである。

たとえば「高橋真由美」の通う中学校の名称は



「文京区立第十二中学校」であるが、区立学校は東京23区だけに見られるローカルなものである。また「区」の存在自体が政令指定都市に限られたものである。また渋谷教育学園中学校の写真では、テニスコートが校舎屋上に設置されていることが紹介されており、文京区立第七中学校の写真では校庭が舗装されているが、これらも日本の都心部の学校独特のものである。また『初七・下』第4課：のコラム「学校の午餐」（学校の昼食）で「真由美」の中学校の学校給食が紹介されるが、学校給食は日本のすべての中学校で行われている訳ではない。さらに『初八・下』第5課の「コラム」、街上流行穿“浴衣”（街で浴衣を着るのが流行っている）のように、現代の日本の中学生（この場合は女子）のリアルタイムな状況が紹介されるいっぽうで、たとえば携帯電話などでのメールのやりとりを友人関係の主幹的な要素とし、あるいは自室においてコンピュータでのゲームやインターネットに時間を費やすことが日常化しているといった中学生の姿は描かれない。4冊を通じて、現代の日本の中学生が、家庭や学校での日常生活で使用している携帯電話やコンピュータなどの情報機器に関する言及はほとんどない。

日本語学習者に、正確で有意義な日本情報や日本イメージを提供するという観点に立つとき、その取捨選択は難しく、かつそこに教科書編纂作業の特色が現れるといえよう。上記学校給食や屋上テニスコートの事例のように、その事例が日本全域に共通のもの、あるいは日本のすべての中学生に共有されるものとは限らなくても、それが日本の社会や日本の中学校の状況の特徴づけ、中国の中学生が興味を持つと考えられる事例であれば、それを紹介する意味は大きい。コラム記事では、それを語る「真由美」たち架空の日本の中学生ひとりひとりの属性（性別、家族構成、居住地など）に依ることが、あるいは彼ら自身の語りを使うことが、その事例が日本全国すべての学校や中学生に共通するとは限らないということを学習者に理解させるための、ひとつの方策にもなっている。

#### 註

- 1) 拙稿「韓国的高等学校日本語教科書における日本像に関する研究」（『福岡教育大学紀要』第41号第4分冊，1992年），「韓国的高等学校外国語教科書における海外イメージの比較考察」（『福岡教育大学紀要』第43号第4分冊，1994年），「中国の中等教育日本語教科書における日本像に関する研究」（『福岡教育大学紀要』第50

号第4分冊，2001年）。

- 2) 北京・对外経済貿易大学，北京・商務印書館，小学館共同編集『日中辞典』小学館，2000年の訳語による。
- 3) 高級中学校（日本の高等学校に相当）用の日本語教科書，人民教育出版社課程教材研究所外語二室編著 全日制普通高級中学教科書『日語』第一冊，第14課の「本文」記事は「ドラえもん」であり，キャラクターとしてのドラえものの解説と，読者からの感想が紹介される単位である。